

# 日本の看護倫理のあした

*Thinking about tomorrow's Japanese nursing ethics*

小西恵美子<sup>1</sup>

Emiko KONISHI

看護倫理の学会が日本に正式に誕生したのは、2008年6月15日、日本看護倫理学会設立集会の会場（神戸）においてであった。当時、国際看護倫理センター（International Center for Nursing Ethics）のセンター長であったAnne J Davis博士（カリフォルニア大学サンフランシスコ校・長野県看護大学名誉教授）は、看護倫理を標榜する学会は世界を見渡してもほとんどないと、この学会の発足を心から喜んで下さった。2007年秋、ある大きな学会の看護倫理検討委員会の最後の会議が終わり、それぞれが帰り仕度についたとき、誰かが「看護倫理の学会をつくろう」と声を上げた。「マジだよ」と再び席に戻り、その場で全員が本学会設立の発起人になった。その時の熱い思いと絆をバネに、準備の集まりを何度も重ね、「会員をどうやってふやすか」「お金のことは」と思いめぐらす発起人たちを、「Start small and grow（小さく始めなさい、そして成長しなさい）」とアメリカから励まして下さったのもAnne先生である。

「専門職組織が設立されて最初の数年は基礎固めの時であり、会員を増やして財政的・人的資源の基盤を作ること、組織の構成、権限、コミュニケーション等の組織の諸側面を定めること等の組織運営に不可欠な事項に取り組む」（p.34）<sup>1</sup>。学会のこれまでの3年半は、Fowlerのこの言葉どおりだった。いくつかの委員会ができ、学会員は増え、学会誌も厚くなってきた。ネット上で「日本看護倫理学会」と打つと、年次大会がズラリと並ぶようにもなった。昨年の大会は岩手。3.11の困難を乗り越え、約3か月遅れて大会を成功させた東北の同胞たちは、全国からやってきた参加者に大きな感動を与えてくれた。学会の基礎はこのようにして固まってきた。発起人のひとりとして正直嬉しく、この学会のない職業人生はもう考えられない。

そして今、Anne先生が言われた「成長」の意味を考えている。先生が意味する成長の一つは会員の「数」であったろう。たしかに、ここまでの関心事は何をおいても「数」であった。でも今は、大き過ぎず小さ過ぎず「程ほどにね」と、Anne先生は言っていたように思える。年次大会では、「程ほど」のサイズの会場に、「程ほど」の人数が集まってじっくりと意見を交わす。休憩時間には「程ほど」の数の友達の輪ができる。これまで4回の年次大会はそんな風景で、「いいね」とAnne先生が呟いているような気がする。そういえば、「程ほど」は「中庸」ということで、倫理の言葉でもある。

「大事なものは成長の中身だよ」と、Anne先生は言っていたに違いない。Fowlerも、「組織が成熟するにつれ、当初の活動範囲を超えて関心事を広げるようになるのが通例」と言っている（p.34）<sup>1</sup>。この学会の成長は日本の看護倫理の成長を映し出す。倫理にはいくつかのアプローチがあるが、この学会ができる前は、ほぼ、自律、善行といった倫理原則の言葉でしか、倫理は語られていなかった<sup>2</sup>。しかし今、私たちの学会誌では、

1 日本看護倫理学会編集委員長 Editor in Chief, Journal of Japanese Nursing Ethics  
佐久大学看護学部 School of Nursing, Saku University

「よい看護師」の概念を中心に徳の倫理が、またケアの倫理も論じられ、原則の倫理一色だった時から、様々な倫理アプローチに着目する時への移行を示している。この変化は、海外ではすでにずっと前に起こっていたが、日本の看護倫理の成長を示すものと言えるだろう。3.11で被災された東北の方々は、冷静、献身、助け合い、忍耐といった徳を示し、その美しさ、素晴らしさに世界中が感動した。思えば、それらの徳は日本人が古来から大切にしてきた、人としての特質である。その社会の所産が日本の看護なのだ。看護倫理がさらに成長していくために、日本の看護師のよさと素晴らしさは今後も記述され続けなくてはならない。

ごく最近までの日本の看護倫理は、看護師が遭遇するジレンマを列挙し分類することに関心を注いできた。しかし現在の流れは、それら問題に学び、解決しようという方向だ。そのためのツールとして、事例検討の役割が大きくなった。本学会の学術活動推進委員会の最近のテーマも事例検討で、私もワークショップに関わらせてもらった。事例は、一見ささやかな日々の看護を描く。だが、掘り下げるとそこに倫理があり、人間の力関係、職場環境、また文化や法の関わりがある。参加者たちの発言は、看護師はすでに倫理的な気づきをもっていると感じさせる。明日の看護倫理は、その気づきをどう行動に移せるかにかかっている。

看護倫理の成長は多様性によっても育まれる。これまでのところ、学会誌上の論文の殆どは病院などの臨床を舞台に、看護師や助産師と患者との一対一の看護を記述している。しかし、看護の活躍の場はそれだけではない。地域や産業などの現場では、一対一の看護を基本としつつ、一対多数の関係性も重視して実践されている。そこで展開される倫理を、学会誌に積極的に寄せて欲しい。それが看護倫理を豊かにしてくれる。

さらに、看護倫理の成長を促す大事な要因に、「考える」「論じる」「対話」がある。この学会誌の「レター」はそのための場としてつくられた。創刊以来、レターへの投稿は絶えることなく続いているのは喜ばしい。もうひとつ、今回の学会誌には「その他」の欄に1編の論文とそれに対する3つのコメントが載っている。このことを書いておく。編集委員会は、投稿論文が査読プロセスを経ることでぐっと論理的に読みやすく変身していくのを見てきたが、任期最後の会議では、査読者が心血を注いで書くコメントが、著者との一対一の対話で終わってしまう（これは他誌も同様）のは勿体ない、一対多数でオープンに学びあう機会があってよいのではないかと話し合った。今回の「その他」の欄の論文は、哲学的なことに「論」を挑んでいた。3人の査読者のうちの1人は条件つき採択を、残る2人は不採択を提案していたが、いずれも、看護倫理の捉え方、その範疇、またその根底をなす哲学への私たちの向き合い方等について白熱コメントをされていた。当該論文と、査読コメントを学会誌上にオープンにして、多数の学びとしたいと委員会は考え、著者・査読者の了承を得て、「その他」のカテゴリーへの掲載記事とさせてもらった。「考える」「論じる」and「対話」が、この学会の伝統となっていくことを願って。

最後に、この学会へのAnne先生のもう一つの貢献について。投稿論文の英文タイトルやアブストラクトはネイティブチェックが前提なのだが、それでも、「ちょっと変かも」と思うような英文がある。それらを編集者が修正する時は、必ずAnne先生の確認を頂いてきた。このような、先生の無償の貢献を知っておいてほしい。そして、Anne先生の修正には、「Good, very clear (とてもよい)」とか、「Sounds interesting (面白そうだね)」などのコメントがいつも付いてきた。編集委員会の仕事は思っていた以上に気苦労の多いものであったが、Anne先生のこれらの言葉は編集者にささやかな喜びを与えてくれた。

## 文献

1. Fowler M. 第4章 社会的倫理, 専門職, 社会. In: Davis AJ, Tsudin V, de Raev L. 2006/小西恵美子 2008. 看護倫理を教える・学ぶ, 倫理教育の視点と方法, 東京:日本看護協会出版会.
2. 小西恵美子, 八尋道子, 小野美喜, 田中真木. 論壇:看護における徳の倫理の意義, 日本看護科学学会誌 2008: 28(4), 3-7.